

# 「コミュニティ・スクール」実践校におけるキャリア意識の分析

## —地域が関わるキャリア教育を目指して—

柿沼 明<sup>1)</sup> 塩田 真吾<sup>2)</sup>

静岡大学大学院教育学研究科修士課程<sup>1)</sup> 静岡大学教育学部<sup>2)</sup>

1999年の中央教育審議会答申にてキャリア教育が提唱された当初より、地域や家庭と連携して体験的な学習を行うよう示された。しかし、現在行われているキャリア教育について、学校が主体として行うだけではなく、地域が主体的に学校に関わる実践については、その事例数は多くない。そこで本研究では、地域が学校に関わる事例として、静岡市立清水江尻小学校で行われている「コミュニティ・スクール」に着目し、そこへ通う子どもたちへのアンケート調査を実施した。その結果、地域の方々とのコミュニケーションなど「人間関係形成・社会形成能力」に関する質問項目において有意差を見ることができた。

キーワード：キャリア教育、小学生、コミュニティ・スクール、地域

### 1. 問題の所在と研究の目的

キャリア教育が求められた背景の一つとして、国立教育政策研究所生徒指導研究センター（2009）は、大人も含めた社会的なネットワークが希薄になったことに伴い、子どもたちや若者の社会的な経験の不足になった結果として、進路意識形成が不十分となっていることを指摘している。そのため、キャリア教育における外部人材活用等に関する調査研究協力者会議（2011）では、キャリア教育を学校だけで行うのではなく、家庭、地域・社会や産業界と協同して推進していくことが必要であることを示している。

こうした地域でのキャリア教育の必要性は、行政側だけではなく、教育側においても述べられている。例えば明石（2005）は「学校だけの進路指導はすでに破綻している。率直に認めざるを得ない」と述べたうえで、これからのキャリア教育に求められているものについて、「子どもの発達に応じたカリキュラムの開発」における「学校だけでは破綻しているという自覚である。ここから家庭・地域（企業を含む）と連携したキャリア教育の推進が生まれるのである」と示している。また、海藤（2010）は、地域での活動を通して育つ子どもの能力<sup>1)</sup>について述べている。

以上のことから、子どもたちのキャリア教育を行うには小学校の中では限界があり、子どもたちの身近な社会である地域において、多くの人と関わり、経験を重ねる

ことで自分の生き方を考えるようなキャリア教育を行っていくことが必要であることがうかがえる。

こうした背景の中、学校現場において、小学校と地域が連携してキャリア教育を行う実践は、多くの学校で行われてきた。先行実践を管見したところ、小学校が地域と連携した実践事例としては、「学校が主体的に関わり地域の場で行う実践」と「地域が主体的に関わり学校の場で行う実践」という2つの形式が挙げられる。

前者としては、浜松市立南小学校<sup>2)</sup>による、地域の職業人より話を伺い、起業体験を行うことによって自分の職業観を高めるといった実践が挙げられる。また、三鷹市立第四小学校<sup>3)</sup>の実践では、地域の写真家・学芸員・印刷会社の方々や仕事現場に触れるだけではなく、最後には自分たちで写真展を開くといった実践が行われている。

後者については、まず、経済産業省が主催となった「地域自律・民間活用型キャリア教育プロジェクト<sup>4)</sup>」が挙げられる。地域でキャリア教育を実施しているNPO法人や企業等が、企業と学校の懸け橋となる「民間コーディネーター」として選定され、学校のキャリア教育の支援が行われた。また、グッジョブおきなわ推進事務局が主催となり「ジョブシャドウイング<sup>5)</sup>」をもとにした「沖縄型ジョブシャドウイング<sup>6)</sup>」も挙げられる。事前・事後活動を加えた一体的なプログラムが小・中学校において実施されている。

これらに共通する課題として、「学校が主体的に関わり地域の場で行う実践」と「地域が主体的に関わり学校の場で行う実践」で共通して、事後のアンケートや自由記述の感想、ポートフォリオなどが評価の対象となることが多く、キャリア教育の効果を定量的に分析している事例が少ないことが課題として挙げられる。先行研究に

Mei KAKINUMA<sup>1)</sup>, Shingo SHIOTA<sup>2)</sup>: Analysis to the Career Consciousness in the "Community School" Practice School: Aim to Do Career Education with Local Community

<sup>1)</sup> Graduate School of Education, Shizuoka University

<sup>2)</sup> Faculty of Education, Shizuoka University

においても、他の学校と比べて検討する分析は見られなかった。

そこで本研究では、子どものキャリア教育としての意識を、他の学校と比べて分析を行うこととし、「地域が主体的にかかわり学校の間で行う実践」として、地域と学校が共に教育方針を検討する「コミュニティ・スクール」に着目した。

研究の方法としては、コミュニティ・スクールを実践している静岡市立清水江尻小学校と、実践していない静岡市立 X 小学校にアンケート調査を行い、その有意差を検定した。アンケートの内容は、学校や地域での生活に関する質問項目を作成した。

## 2. コミュニティ・スクールの概要

### 2.1. コミュニティ・スクールとは

コミュニティ・スクールとは、保護者・地域住民・有識者などから構成された「学校運営協議会」を設置した学校のことである。学校運営協議会では、学校の運営について意見を述べたり、基本的な方針を承認したりすることができる。正式名称は「学校運営協議会制度」であるが、設置された学校の通称として「コミュニティ・スクール」と呼ばれている。

コミュニティ・スクールは、2000年に教育改革国民会議において「新しいタイプの学校」として、設置について提言された。その後、2001年に文部科学省より発表された「21世紀教育新生プラン(レインボープラン)」より、「今後の新しいタイプの学校の可能性や課題等について検討」における実践研究として、翌年2002年より、千葉県習志野市立秋津小学校をはじめ7件9校にて、研究実践指定校として3年間の実践研究が行われた<sup>7)</sup>。中央教育審議会答申(2004)では、この研究の成果をもとに、教育活動の実践に地域のニーズが反映されることや、教員と地域の相互の連携の促進・コミュニケーションの活発化が期待されることから、コミュニティ・スクールの制度の導入を提唱している。その後、同年9月の「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」の一部改正により、学校運営協議会の設置について制度化された。

### 2.2. 「静岡市立清水江尻小学校」での実践

静岡市立清水江尻小学校は、江尻城跡に建てられ、学区の近くにはJR清水駅や清水銀座商店街がある、長い歴史と伝統がある学校である。これまでの学校と保護者・地域の関係は、サービスを行う学校に対して保護者・地域は批判するという対立構造になっていた。しかし、2009年度より、静岡市の学校応援団事業を実施して以来、年間延べ6000人もの人々が環境面・学習面・

安全面等でのボランティア活動に参加したという。こうして、地域・保護者が子どもの教育に携わることによって、協力的な関係を築くようになった。そして、静岡市教育委員会より研究校として指定を受け、2013年度に準備事業が行われ、2014年度には、本格的にコミュニティ・スクールが始まった。

清水江尻小学校では、コミュニティ・スクールの理念として「江尻っ子の笑顔を江尻に 江尻の力を江尻っ子に」を掲げている。その中では、子どもの成長が中心として位置されており、学校・家庭・地域が結束して子どもたちの学びを広げていくことによって、その学びの豊かさが、地域の豊かさにつながっていくという考え方である。さらに、これまで実践されてきたコミュニティ・スクールが、必ずしも有効に継続できていないという課題から、「持続可能で負担なく」をテーマとして掲げ、地域から学校へ支援を行うだけではなく、学校(子ども)から地域へもメリットがある在り方を探求している。

コミュニティ・スクールの運営体制としては、学校側として校長・教頭・教務主任・研修部・生徒指導部・特別活動部の教員と事務のほか、地域の方々と学校応援団コーディネーターによる13名で学校運営協議準備会を構成している。学校運営協議準備会においては、学校のコミュニティ・スクール推進における支援内容の検討や情報交換を行っており、具体的な活動内容については、以下の3つの支援部会に分かれて議論が行われている<sup>8)</sup>。

#### ○安全環境支援部会

安全環境支援部会は、子どもたちが地域で安心して暮らすことができるように、地域における教育の環境整備を担当している。活動例としては、子どもの登下校中の通学路における見守り、学校周辺にあるウォーキングコースの活性化、授業で使う教材小道具の製作や校外活動のサポートが挙げられる。

#### ○学習支援部会

学習支援部会では、子どもの学習習慣が確立する環境を、学校・家庭・地域を共同して構築していくことを目的としている。活動例としては、「放課後学習室」による子どもたちの学習支援や地域の方を講師に招いた講座、図書館の整備や子どもたちに読み聞かせを行う「図書ボランティア」が挙げられる。

さらに、総合的な学習の時間など、地域を活用して行う学習について、各学年の計画と照らし合わせながら調整が行われた。

#### ○活動支援部会

活動支援部会では、子どもたちと地域が関わるために、地域行事への参加の促進や、学校と地域の連携した教育

の在り方について検討していくことを目的としている。活動例としては、「地域への学校行事の情報発信」として、子どもが作った学校行事を宣伝するポスターの掲示を行ったり、「子どもと地域の人々の交流促進」として、クラブ活動や委員会活動のボランティアとして参加したりすることが挙げられる。

また、「平成 26 年度静岡市キャリア教育担当者会」にて提出された報告書によると、清水江尻小学校のキャリア教育では、「将来を見つめ、自らの生き方を考える力を育てる」を目標に、低学年・中学年・高学年それぞれにおいて「基礎的・汎用的能力」の 4 領域から学年指導目標を設定している。それらは各教科・道徳・特別活動・総合的な学習の時間の中で指導していくものとされているが、それらの推進の基盤として、「PTA 及び地域の諸施設、諸機関との連携」「地域の諸行事、人材、環境等を生かした題材開発」「近隣中学校との協力・連携」が位置づけられていることから、こうした地域の力は、キャリア教育としても積極的に活用する意識がうかがえる。

さらに、コミュニティ・スクールを実施してから、支援部会からの提案により、地域と子どもが交流できるような授業プログラムが提案された。例えば、4 年生は、学校運営準備会の協力を得て、総合的な学習の時間として S 型デイサービスを訪問し、お年寄りの方々との交流を行った。その中で、お年寄りの方々ために、得意な技を披露したり、一緒にトランプなどのゲームを行ったり、学校で育った花のプレゼントなどを行ったりすることによって、相手からの感謝を実感し「地域の方々の役に立つ」といった意識が強まったことが考えられる。5 年生は、学習支援部会の活動内容で説明したように、「子どもまちゼミ」として、お店の取材を行い、商店街の店長やお店について紹介する「店長図鑑」を作成した。6 年生においては、「ふるさと玉手箱」として、商店街など地域の方々への取材をもとにパンフレットを作成し、模型や DVD・試供品なども入れて、自分たちの住む地域のお宝を「玉手箱」としてまとめた。この「玉手箱」を、新潟県の小学校 6 年生の子どもたちと交換をし、地域の交流を深めた。

### 3. キャリア教育としての分析

#### 3.1. 子どもを対象としたアンケート調査の分析方法

分析の方法としては、コミュニティ・スクールを実践している清水江尻小学校と、実践していない静岡市立 X 小学校にアンケート調査を行い、t 検定で比較を行い、有意差を検定することとする。

X 小学校キャリア教育の取り組みについては、「平成 26 年度静岡市キャリア教育担当者会」にて提出された

報告書によると、よりよい人間関係を構築する力・目標達成に向けて努力する力・勤労の価値や楽しさを見つける意識・将来の自分をイメージすること力の育成を目指している。そのための発達における指導目標について、「基礎的・汎用的能力」をもとに、低学年・中学年・高学年における重点目標として示している。この重点目標を達成する場として、各教科・道徳・特別活動・総合的な学習の時間・学校行事など、学校生活のさまざまな場面を位置付けている。地域との関わりについては、特に、付近にある高等学校の生徒と共同し、野菜作りから販売を行うまでの実践が挙げられる。しかし、以上のキャリア教育の位置づけにおいては、地域の活用に関する項目はあまり設けられてはいない。また、地域と関わる機会は、社会科見学をはじめ、授業において必要な時に交流活動を行うことが主であり、日常の中で継続的に取り組みを行っているわけではないことから、今回の調査における比較対象校とした。

これより、対象は、清水江尻小学校の 4 年生から 6 年生の計 204 名及び、静岡市立 X 小学校の 4 年生から 6 年生の計 375 名とする（表 1）。

表 1 小学校 4 年生~6 年生の内訳

	清水江尻小学校				X 小学校			
学年	4 年	5 年	6 年	合計	4 年	5 年	6 年	合計
人数	77	57	70	204	140	134	101	375
男	38	28	42	108	58	69	51	178
女	39	29	28	96	82	65	50	197

子どもたちには、「学習・生活に関するアンケート」として、以下の 16 の質問項目に 4 件法（とてもそう思う、まあまあそう思う、あまりそう思わない、まったくそう思わない）で回答してもらった。質問項目について、「自分の行動に関する質問項目」は、中央教育審議会答申（2011）にて提示された「基礎的・汎用的能力」に着目し、子ども自身の生活行動をもとに領域ごと作成した。一方で、「自分が住む地域・学校への意識に関する質問項目」については、地域との関わりが主となることから、「基礎的・汎用的能力」の一つである「人間関係形成・社会形成能力」に着目して、質問項目を作成した。さらに、地域との関わりによる日常生活での意識の変化を見るために、三村（2005）が提示する「職業観・勤労観」の定義をもとにした質問項目も作成した。

これらの質問項目だけで、キャリア教育の能力の全てを分析できるとは言えないが、今回は、実践でアンケートを実施する時間や、子どもたちのわかりやすい文章を考慮して作成した。

自分の行動に関する質問項目

・人間関係形成・社会形成能力

- 問 1. 先生や友だちに、あいさつやお礼を言うことができる
- 問 2. 友だちや班のひとと、力を合わせて行動することができる

・自己理解・自己管理能力

- 問 3. 自分のいいところ・わるいところがわかる
- 問 4. 係や当番など、自分がやるべき仕事を、さいごまでやり通している

・課題解決能力

- 問 5. わからないことがあったら、自分で質問をすることができる
- 問 6. 計画を立てて、やるべきことを行っている

・キャリアプランニング能力

- 問 7. 学校のべんきょうが、しょうらいの自分の役に立つと思う
- 問 8. しょうらいにむけて、自分がどんなことをしたいか考えている

自分が住む地域・学校への意識に関する質問項目

・人間関係形成・社会形成能力

- 問 9. 毎日、学校へ行くのが楽しみである
- 問 10. 地いきの人たちに、自分からあいさつができる
- 問 11. 地いきの行事（子ども会・夏祭り・清そう活動など）によく行っている
- 問 12. 地いきの人たちは、自分にさまざまなことを教えてくれると思う

・職業観

- 問 13. 自分が住む地いきの人たちが行っている仕事にきょうみを持っている

・勤労観

- 問 14. 自分の住む地いきの中で、見習いたいと思う人がいる
- 問 15. 自分は、住んでいる地域の役に立っていると思う
- 問 16. しょうらい、自分は住んでいる地いきで役に立つことをしたいと思う

表 2 アンケート調査の平均値の結果の比較 (t 検定)

質問内容	全体			4年生			5年生			6年生		
	江尻平均	X小平均	有意差	江尻平均	X小平均	有意差	江尻平均	X小平均	有意差	江尻平均	X小平均	有意差
問 1 (あいさつやお礼)	3.39	3.44		3.43	3.40		3.22	3.50		3.47	3.42	
問 2 (力を合わせて行動する)	3.27	3.20		3.38	3.10	**	3.08	3.35		3.30	3.15	
問 3 (長所・短所)	3.38	3.37		3.35	3.43		3.33	3.29		3.45	3.38	
問 4 (仕事を最後までやる)	3.28	3.27		3.29	3.35		3.10	3.24		3.41	3.19	*
問 5 (質問する)	3.00	2.69	**	3.01	2.73	*	2.93	2.71		3.05	2.60	**
問 6 (計画を立ててやる)	3.02	2.83	**	3.10	2.75	**	2.94	2.92		3.01	2.83	*
問 7 (学校の勉強が役に立つ)	3.52	3.48		3.57	3.48		3.43	3.48		3.54	3.50	
問 8 (将来何をするのか)	3.37	3.41		3.43	3.34		3.19	3.44		3.44	3.47	
問 9 (学校が楽しみ)	3.39	3.20	*	3.44	3.15	*	3.17	3.33		3.50	3.08	**
問 10 (地域の人への挨拶)	3.27	3.22		3.26	3.13		3.22	3.32		3.31	3.20	
問 11 (地域行事によく行く)	3.13	2.88	**	3.28	3.07		3.12	2.74	*	2.97	2.79	
問 12 (地域が教えてくれる)	3.09	2.89	*	3.14	2.87	*	3.14	2.91		3.00	2.87	
問 13 (地域の仕事への興味)	2.57	2.47		2.71	2.45	*	2.49	2.47		2.47	2.48	
問 14 (見習い人)	2.69	2.66		2.89	2.70		2.70	2.56		2.45	2.73	
問 15 (地域の役に立つ)	2.39	2.20	*	2.55	2.16	**	2.22	2.36		2.34	2.05	*
問 16 (将来役に立ちたい)	3.09	3.19		3.26	3.15		2.91	3.22		3.05	3.19	

\*\* : p<.01, \* : p<.05

また、2014年5月より、筆者は清水江尻小学校へスクールボランティアとして関わり、参与観察を行った。今回は、その様子も踏まえながら分析を行っていく。

### 3.2. 子どもを対象としたアンケート調査の分析結果

子どもを対象としたアンケート調査の結果を、以下の通りにまとめた。なお、「とてもそう思う=4点、まあまあそう思う=3点、あまりそう思わない=2点、まったくそう思わない=1点」とし、それらの平均点を示した(表2)。

4年生から6年生全体での分析の結果、「問5. わからないことがあったら、自分で質問をすることができる」「問6. 計画を立てて、やるべきことを行っている」「問9. 毎日、学校へ行くのが楽しみである」「問11. 地いきの行事(子ども会・夏祭り・清そう活動など)によく行っている」「問12. 地いきの人たちは、自分にさまざまなことを教えてくれると思う」「問15. 自分は、住んでいる地域の役に立っていると思う」において、有意差を見ることができた。

さらに、学年別で見ていくと、4年生は、問11には有意差が見られなかったものの、「問2. 友だちや班の人と、力を合わせて行動することができる」「問13. 自分が住む地いきの人たちが行っている仕事にきょうみを持っている」において有意差が見られた。6年生は、問12の有意差は見られなかったものの、「問4. 係や当番など、自分がやるべき仕事を、さいごまでやり通している」において、有意差が見られた。一方で5年生は、問11以外の項目において、有意差は見られなかった。

また、筆者がスクールボランティアとして参与観察を行ってきた中で特に印象的だったのが、地域の方々がボランティアとして積極的に参加していることであった。例えば、学校外の社会科見学へ行く際は、2~4人の保護者が付き添いのボランティアとして参加し、子どもたちが道路で歩く際に、安全の確認や子どもへの声かけを行っていた。また、学校内においても、図書室には数人の図書ボランティアが活動を行っており、休み時間に子どもたちがやってくると話をしている様子も見られた。さらに、総合的な学習の時間を用いて、地域の方が学校へ来て、地元の文化について講話をしてくれるということもあった。

以上の結果について、考察を述べる。4年生から6年生で有意差が見られた問をキャリア教育の「基礎的・汎用的能力」に照らし合わせると、「人間関係形成・社会形成能力」として、問9・問5・問11・問12、「課題対応能力」として問6が当てはまることが考えられる。また、問14については、日常生活での役割における価値観の形成という意味で、「勤労観」に当てはまることが考えられる。

この中で、一番有意差の出ている項目が多いのは「人間関係形成・社会形成能力」であるが、特に問11・問12の内容より、地域の人々との関わりに対しての意識を強めていることが考えられる。参与観察の結果も踏まえると、さまざまな学校生活の場で地域の人々と関わりによって、「人間関係形成・社会形成能力」に関連する、地域の人々の理解や地域への参画の意識の形成を助長したことが考えられる。また、問5については、こうした地域の方々とのコミュニケーションの方法として、積極的に活用されたのではないかと考えられる。

次に、「勤労観」については、4年生はS型デイサービス訪問、5年生はお店への取材、6年生は自分の地域について他の地域の子どもたちへ紹介するなど、地域へ出かけたり協力したりすることによって、問14で有意差が見られたように、地域での自分の役割に関する意識が強まったということが考えられる。こうした活動に意義を感じたり、地域での自分の役割を自覚したりすることによって、「自己理解・自己管理能力」に当たる問9では、自己肯定感が高まり、学校へ行くのが楽しいと感じる意識が強まったことが考えられる。

これらについては、アンケートによる子どもの自己評価だけではなく、地域の方々の回答からもうかがうことができる。筆者は、子どもへのアンケート調査と同時に、コミュニティ・スクールの支援部会に携わる地域の方々12名にアンケートを行った。ここでは、「コミュニティ・スクールが始まって、あなたは、主体的に学校に関わるようになったと思いますか?」「コミュニティ・スクールが始まって、あなたは、子どもたちと話すことが増えたと思いますか?」という質問項目に対して、8名が「とても」、2名が「まあまあ」といった肯定的な回答を示した。また、「活動中、子どもと話す機会はどの程度ありましたか?」という質問項目では、6名が「毎回あった」、4名が「ときどきあった」という回答を示した。

その他に、有意差が見られた「課題対応能力」である問6は、学校の重点目標「進んで自分の考えを言葉や行動で表す」において、めあてを持って行動することを重視していたことから、普段の学校生活における指導もあって身についたことが考えられる。また、問5については、「課題を意欲的に解決しようという意識」において「課題対応能力」にも当てはまることから、問6と同様に、学校生活の中でも意識づけられたものであることが考えられる。

一方で、「課題対応能力」に関する問5と問6を除き、子ども自身の生活や行動に関する質問項目については、有意差を見ることができなかった。さらに、「問16. しょうらい、自分は住んでいる地いきで役に立つことをしたいと思う」では、地域との関わりを意識が強まったに

も関わらず、有意差を見ることができなかった。これらについては、「問 10. 地いきの人たちに、自分からあいさつができる」について有意差が見られなかったことにもあるように、子どもたちが地域の人々にさまざまなことをやってもらっているといった受け身の姿勢が強く、自分の行動意識の形成にまでは至らないことが考えられる。

また、問 15 を学年ごとに分類した分析の結果を見ると、それぞれの平均値にはばらつきがあり、4年生の平均値が最も高かった。これは、お年寄りの方々に何をするのか自分で考え、相手が喜んでる姿を直接目にしたことから、意識として強まったのではないかと考えられる。このように、それぞれの活動によって、大きく変化があることが考えられる。

以上より、清水江尻小学校の子どもたち全体においては、各学年のプログラム等でばらつきはあるが、コミュニティ・スクールで生活した子どもたちの自己評価として、特に地域の方々とコミュニケーションに関する「人間関係形成・社会形成能力」や、地域での自分の役割に関する「勤労観」の意識が強まったことが考えられる。それらの意識形成をもとに、自己肯定感が高まり、学校へ行くことの意義を感じることで、つながるものであると考える。こうした一連については、地域の方々のアンケート方も見えるように、コミュニティ・スクールを行うことによって、子どもたちと地域の方々と直接的に関わる機会が増加したためではないかと考えられる。しかし、子ども自身の行動については意識が強まっていないことから、子どもたちは、地域の方々にいろいろやってもらっているという受け身の姿勢が強いことが考えられる。これは、地域の方々の活動内容や、子どもとの関わり方が影響することが考えられる。

#### 4. 成果と課題

コミュニティ・スクールとしてのキャリア教育の成果は、地域の方々と関わりが増加したことによって、子どもたち自身の「人間関係形成・社会形成能力」や「勤労観」に関する意識が向上したことにあると考える。清水江尻小学校では、子どもたちと地域の方々と関わりとして、民話の読み聞かせや放課後学習・職場体験の協力、ボランティアの参加など、授業だけではなく多岐にわたって行われた。これは、コミュニティ・スクールによって学校と地域の人々とのネットワークが広がり、地域が子どもへ関わる機会が増加したことが考えられる。こうして地域の方々と関わりによって、子どものアンケート調査では、「わからないことがあったら自分で質問をすることができる」「地域の人たちは、自分にさまざまなことを教えてくれる」について有意差が見られ、地域

の方々とコミュニケーションに関する「人間関係形成・社会形成能力」の意識が向上できたことが考えられる。さらに、子どものアンケート調査において「地域の行事に参加している」「自分は地域の役に立っている」の項目において有意差が見られたことから、地域での役割に関する「勤労観」の意識も強まったことが考えられる。

一方で、課題としては、キャリア教育としての地域の方々の活動の在り方が挙げられる。子どものアンケートでは、「課題対応能力」に関する「わからないことがあったら自分で質問をすることができる」「計画を立てて、やるべきことを行っている」については強く意識を持つことができたが、自分の生活に関わる他の質問項目については、比較をした X 小学校とあまり変わりはない。このことから、子どもは地域の人々との関わりをもつことで、地域を親しむことができたものの、そこで得た経験を「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」などに関する意識として、自分の生活へ活かすところまでに至っていないことがうかがえる。さらに、「地域の人たちは、自分にさまざまなことを教えてくれる」においては有意差が見られたにも関わらず、「しょうらい、自分は住んでいる地いきで役に立つことをしたいと思う」では、有意差を見ることができなかった。また、地域の方々の活動内容が、ボランティアや放課後学習など、子どもたちに一方的に「やってあげる」ものが多く、子どもたちと共に行う内容はあまり多くはなかった。こうした背景より、子どもたちは地域の方々と関わりによって、コミュニケーション能力の向上はできたものの、地域の人に「やってもらう」といった、受け身の姿勢になっていることが考えられる。こうした課題に対して、コミュニティ・スクールにおけるキャリア教育の浸透が必要とされる。

これらについては、長期的な視点をもって、今後継続していく上で検討すべき課題であると考えられる。佐藤 (2013) によると、2011 年に全国のコミュニティ・スクールを対象に行ったアンケート調査の結果から、指定年度の新しい学校の成果として強く表れたのは「学校と地域の情報共有」であった。一方で、平成 16 年・17 年よりコミュニティ・スクールを始めた学校と、平成 23 年より始めた学校のアンケートの肯定値差を算出して、小さい順に項目を並べると、「地域の教育力が向上した」という項目が 9 位中 8 位であり、長期的成果であることが明らかになったという。清水江尻小学校がコミュニティ・スクールとして指定されてからまだ 2 年しか経っていないことから、今後の活動において、学校と地域がキャリア教育を理解し、育てたい子どもの意識を共有したうえで、学校生活や授業と地域の方々の活動がつながるような実践の在り方を検討していくことが

必要であると考えられる。

また、今回は主に子どもの自己評価をもとに分析が行われており、客観的な評価については含まれていない。そのため、子ども自身の意識は高まったものの、能力が向上したかどうかについては、客観的な視点が必要となる。今後は、客観的な評価も含めた実践の分析方法の検討もしていく必要がある。

- 1 海藤 (2010) は、平成 19 年度東京都江東区地域連携推進指定校の学校連携の研究結果をもとに、子どもの自己効力感の高まりを 3 段階のステップに整理した。第一段階は、社会貢献体験活動で達成感や充足感を獲得する「自己有用感」。第二段階は、自己有用感が高まり、自分の長所・短所を認め、自己を肯定する「自己肯定感」。第三段階は、体験の積み重ねによって、自分が目標達成能力を持っているということを確認し、将来の夢を表現できる「自己効力感」である。
- 2 澤田正樹 (2006) 「輝け！海老塚の星 キラーン～起業体験による職業観の育成～（6 年生の実践）」、山崎保寿 (編) 『キャリア教育で働く意識を高める』、学事出版、pp.56-64
- 3 岡田 実・山木 茂 (2008) 「写真展から社会をのぞこう」児童心理 2008 年 2 月号臨時増刊、pp.131-136
- 4 経済産業省 (2007) 「キャリア教育ガイドブック 実践編」、経済産業省
- 5 ジョブシャドウイングとは、もともとアメリカで行われてきた取り組みである。仕事を体感する職場体験やインターンシップに対して、働く大人に焦点を当てて、その人に影のようについていながら、仕事内容や職場の様子、働く人の内面などを観察していく。
- 6 グッジョブおきなわ推進事業局 (2013) 「沖縄型産学官・地域連携グッジョブ事業 沖縄型ジョブシャドウイング事業実施報告書—平成 25 年度—」
- 7 文部科学省ホームページ「コミュニティ・スクール設置の手引き：(参考 2) 「新しいタイプの学校運営の在り方に関する実践研究」について」  
([http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/community/school/detail/1311356.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/community/school/detail/1311356.htm))、最終アクセス 2015/03/20
- 7 グッジョブおきなわ推進事業局 (2013) 「沖縄型産学官・地域連携グッジョブ事業 沖縄型ジョブシャドウイング事業実施報告書—平成 25 年度—」
- 8 支援部会の概要については、清水江尻小学校ホームページ、静岡市立清水江尻小学校 (2015) 「静岡市学校運営協議会制度研究事業【平成 26 年度実践事例集】」 pp.11-16、静岡市立清水江尻小学校 (2013) 「2013 年 7 月研修会資料」を参考にまとめた。

引用・参考文献

- 明石要一 (2005) 「なぜキャリア教育が必要か」、現代教育科学 1 月号、p.11
- 岡田 実・山木 茂 (2008) 「写真展から社会をのぞこう」児童心理 2008 年 2 月号臨時増刊、pp.131-136
- 海藤美鈴 (2010) 「キャリア教育における学校＝地域連携」、仙崎 武・池場 望・下村英雄・藤田晃之・三村隆男・宮崎 冴子 (編) 『キャリア教育リーダーのための 図説 キャリア教育』、社団法人雇用問題研究会、pp.184-185
- 川上泰斗 (2014) 「静岡版コミュニティ・スクールを創造 第 29 回時事通信社『教育奨励賞』推進校の実践⑨」、内外教育 6359 号、pp.12-13
- キャリア教育における外部人材活用等に関する調査研究協力者会議 (2011) 「学校と社会が協働して一日も早くすべての児童生徒に充実したキャリア教育を行うために」、p.6
- 教育新聞「小学校教師も多忙な実態 日本標準教育研が調査」、2014 年 7 月 21 日号 4 面、  
([http://www.kyobun.co.jp/news/20140721\\_03.html](http://www.kyobun.co.jp/news/20140721_03.html))、最終

- アクセス 2014/1/24
- グッジョブおきなわ推進事業局 (2013) 「沖縄型産学官・地域連携グッジョブ事業 沖縄型ジョブシャドウイング事業実施報告書—平成 25 年度—」、pp.7-8
- 経済産業省 (2007) 「キャリア教育ガイドブック 実践編」、経済産業省、pp.12-18
- 厚生労働省ホームページ  
([http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/koyou\\_roudou/shokugyouounouryoku/career\\_formation/career\\_consulting/index.html](http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/koyou_roudou/shokugyouounouryoku/career_formation/career_consulting/index.html)) 最終アクセス 2015/02/22
- 国立教育政策研究所生徒指導研究センター (2009) 『キャリア教育体験活動事例集—小・中・高・大学や教育委員会、家庭や地域社会との連携・協力—』、実業之日本社、p.12
- 佐藤晴雄 (2013) 「コミュニティ・スクールによる地域活性化の課題—文部科学省委託調査の結果から—」、社会教育第 68 巻 2013 年 5 月号、p.40
- 澤田正樹 (2006) 「輝け！海老塚の星 キラーン～起業体験による職業観の育成～（6 年生の実践）」、山崎保寿 (編) 『キャリア教育で働く意識を高める』、学事出版、pp.56-64
- 静岡市立清水江尻小学校ホームページ  
(<http://www.ejiri-e.shizuoka.ednet.jp/>)、最終アクセス 2015/03/24
- 静岡市立清水江尻小学校 (2013) 「2013 年 7 月研修会資料」
- 静岡市立清水江尻小学校 (2015) 「静岡市学校運営協議会制度研究事業【平成 26 年度実践事例集】」 pp.11-16、24-29
- 中央教育審議会答申 (2004) 「今後の学校の管理運営の在り方について」、文部科学省ホームページ  
([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku/attach/1345472.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku/attach/1345472.htm)) 最終アクセス 2014/12/28
- 中央教育審議会答申 (2011) 「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」、pp.25-26
- 三村隆男 (2005) 『キャリア教育入門 その理論と実践のために』、実業之日本社、p.65
- 文部科学省 (1998) 「新しい学習指導要領の主なポイント（平成 14 年度から実施）」、文部科学省ホームページ  
([http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/cs/1320944.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/cs/1320944.htm))、最終アクセス 2014/12/29
- 文部科学省 (2004) 「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」、(<http://law.e-gov.go.jp/cgi-bin/strsearch.cgi>)、最終アクセス 2014/12/29
- 文部科学省 (2008) 「コミュニティ・スクール事例集」、文部科学省ホームページ  
([http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/community/school/detail/1311295.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/community/school/detail/1311295.htm))、最終アクセス 2014/12/29、p.8
- 文部科学省 (2009) 「第 1 回キャリア教育・職業教育特別部会配布資料」、文部科学省ホームページ  
([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo10/shiryo/1299768.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo10/shiryo/1299768.htm))、最終アクセス 2014/02/22
- 文部科学省、国立教育政策研究所生徒指導研究センター (2011)、『キャリア教育の更なる充実のために—期待される教育委員会の役割—』、pp.10-11